視覚障害を抱える人々にむけて講義を書きおこす
―『アンという名の少女』に描かれる インクルーシブな「アンの世界」―

荒　木　陽　子

はじめに

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の施行（2016）に伴い、障害を抱える学生への合理的配慮の提供は、既に国立大学では法的義務となっている。そして2021年６月４日公布の同改正法により、３年以内、つまり2024年度中には、現在は同様の配慮が努力義務である私立大学でもそれが法的義務となる。本稿はこのような状況のなかで、これまで視覚資料を多用する授業を行ってきた筆者が、視覚障害を抱える学生への「合理的配慮」の一環として、指示語を避け、コンピューターで読み上げ可能かつ、図像を視覚イメージ以外の方法でつたえられる90分講義の書き起こしをはじめて作ろうとする取り組みを、そのまま論文化する試みである。このような背景事情が存在するため、通常の論文にみられるような章割り、段落構成に加えて、高度に学術的な内容、表現、文言、註等の適切な使用等ができない場合もあることを先に断る。なお、学生に提供される文書や実際の授業では、「本稿」や「本章」、「筆者」などという文字媒体特有の表現は、「本講義」、「ここでは」や「私」などという、講義用の表現に、また使用される英数字フォントは、ここにあるタイムズ・ニューローマンではなく、コンピューターソフトで読み取り可能なエリアルに置換されることはご理解いただきたい。

学生の理解を促すために不十分な点に関しては、同様の取り組みをされている研究者からのご指導をあおぎたい。

2022年10月19日　授業
授業名　コミュニケーション入門　第５回
教員　荒木　陽子

Ⅰ　導入――『赤毛のアン』と『アンという名の少女』の設定の違いから、ドラマ制作者の意図を考える

1908年に出版されたルーシー・モード・モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery, 1874－1942）の小説『赤毛のアン』（*Anne of Green Gables*）は、日本

でも広く知られる数少ないカナダ文学作品である。2022年秋現在、その直近のスピンオフテレビ作品シリーズのひとつが、2017年から2019年にかけて、カナダにおいて３シーズンにわたって放映された連続ドラマシリーズ『アンという名の少女』である。同作ドラマシリーズの英語タイトルは *Anne with an E*、カナダでの放送はカナダ放送協会（Canadian Broadcasting Corporation, 以下CBC）、その他地域はネットフリックス（Netflix）が配給した。日本でも日本放送協会（以下、NHK）が同シリーズを深夜枠ではあるが、2020年秋から22年春にかけて放映していた。ここではそれぞれの地理設定、時代設定を確認していきたい。

１．地理設定

前回10月５日の授業では、アメリカ州（Americas）の地理的概要、および『赤毛のアン』のあらすじを学んだ。『赤毛のアン』ならびに『アンという名の少女』の大方の舞台は、そこで確認した北アメリカ大陸の北東、カナダ東海岸のセントローレンス湾に浮かぶプリンスエドワード島である。島の西南部のコミュニティ、ボーデン・カールトンは13キロ弱あるコンフェデレーション橋でニューブランズウィック州のポート・ジュリマンと、また島の南岸中央部のウッドアイランズからはフェリーにて対岸のノヴァスコシア州カリブーとつながっている。この愛媛県程度の大きさの島のかたちは、しばしばくぼみを上にした三日月やゆりかごに例えられるが、その北岸中央部のキャベンディッシュ付近が、『赤毛のアン』の舞台であるアヴォンリー村のモデルとなった実際のコミュニティである[1)]。

２．時代設定：『赤毛のアン』と『アンという名の少女』の「ずれ」

次に小説とドラマの時代設定のずれに着目したい。というのは、筆者は２作品の時代設定のずれは、あらかじめ存在する物語を基盤に用いて表現することを選択したドラマの制作者の「意図」を理解するために、重要だと考えているからだ。『赤毛のアン』の時代設定およびアンの年齢設定についてはあいまいなため諸説あるが、おおむね1870年代後半から1880年代初頭である。小説終盤第37章では、アンの育ての親マシューが死の直前にプリンス・エドワード・アイランド銀行破綻（1881）をモデルとするアビー銀行倒産の知らせをうける。その時アンが16歳であったことを考えると、アンは1860年代半ばの生まれであると想定できるので、本稿ではこの理解に沿いたい。

ところが『アンという名の少女』については、時代設定がかなり後にず

らされている。ドラマ第１シーズン第１エピソードでアンは1896年に13歳でノヴァスコシアから島に移住している。このことから、ドラマのアンは小説のアンより20歳近く若く、19－20世紀転換期のカナダを生きていることとなる。

前述の通り中心となる地理設定はおおむね同じである一方で、この時代設定の違いは、ドラマの物語上で何を意味するのか。本稿ではドラマの制作者たちが、作品の設定を後にずらした理由を、現代カナダの多文化主義を背景に、登場人物の書き換えと合わせみながら考察する。

Ⅱ　『赤毛のアン』と『アンという名の少女』のコンテントの違い：多様性をもとめて

『アンという名の少女』のスクリーンプレイを掌るのは、テレビ女優、作家、プロデューサーのモイラ・ウォーリー＝ベケット（Moira Walley-Beckett）である。このウォーリー＝ベケットは『ブレイキング・バッド』（*Breaking Bad*, 2008－2013）など人気テレビドラマシリーズのプロデューサー陣のひとりとしても知られており、『アンという名の少女』に関しても総合統括プロデューサー陣に加わっている。ただ、『アンという名の少女』の総合統括プロデューサー陣のスポークスマンは、ケヴィン・サリヴァン（Kevin Sullivan）の監督作品であるCBCのテレビ映画『赤毛のアン』（*Anne of Green Gables*, 1985）でジョジー・パイ役を演じたミランダ・ド・パンシエ（Miranda de Pencier）という人物である。このサリヴァン監督の『赤毛のアン』は、日本でもNHKで放映されていたが、数あるアンのメディアミックス作品でも、世界的に知名度が高い作品のひとつである。筆者はこの２人の制作者のメディアにおける発言、特にその微妙なずれの中に、『アンという名の少女』が『赤毛のアン』から、キャラクター的に、そして時代的に大きく異なる形で制作されなければならなかった理由を見出すことができると考える。本章ではウォーリー＝ベケットの発言から検討をはじめたい。

１．人種・民族的マイノリティの加筆

ジャーナリストのビクトリア・エイハーン（Victoria Ahearn）は、2019年11月25日付けの記事において、同年９月にウォーリー＝ベケットが、白人中心に描かれた『赤毛のアン』が現在と過去のカナダの多様性を反映していない点を指摘する発言をとりあげている。ウォーリー＝ベケッ

トによれば本シリーズの企画当初からの主たるねらいは、「この国の多様性を本当に、そして正当に反映する方法を探る」ことであったと言うのである。彼女はこの記事以前にも、2018年７月には、ハーン・ウィン（Hanh Nguyen）との『インディワイヤ』（*IndieWire*）上のインタビューの２頁目でも、オリジナル作品の極端に白人主義的世界観を「不快」（“uncomfortable”）であると断言し、そこを是正することが当初からの「基本計画」（“masterplan”）であったと強い言葉を使って発言しているから、その意図に間違いはないだろう。

このウォーリー＝ベケットの発言を実現すべく、『アンという名の少女』では、時代設定のみならず、アン以外の登場人物の人となりが大きく作り替えられている。さらに、その改変は単なる「作り替え」にとどまらず、原作には存在しなかった新たな人物が書き加えられている。大きな書き換えの例をここに列挙すると、アンの育ての親たるカスバート兄妹はカスバート姉弟として書き換えられるとともに、アンの親友ダイアナはカスバート家のフランス系使用人（ドラマの中では単にフランス系ではなく、明確にアカディア人と示されている）ジェリー・ブートと恋に落ちる[3)]。プリンスエドワード島北岸に多く住み、かつては英語系からの様々な差別をうけたフランス語系マイノリティ――数の上では彼らがマイノリティではないコミュニティすらある――のアカディア人を、あえて英語系の良家の娘と結びつけるストーリーからウォーリー＝ベケットの「是正」の意図が伝わる。

そして筆者が特に重要であると考えるのは、原作では後にアンの夫となるギルバートのキャラクター設定の書き換えである。ドラマではギルバートは父を失った後、船員となる。そして、そこで出会ったトリニダード出身でアフリカ系のセバスチャン（ニックネームはバッシュ）とその家族に自らの農場を委ね、医師となるためにトロント大学へと向かうのである。ギルバートは原作ではアンとともにシャーロットタウンのクイーンズ学院に通った直後は島で教員となる。また、『赤毛のアン』にはアフリカ系の人物は登場しないから、セバスチャンはドラマにおける完全な創造である。

さらに『アンという名の少女』で書き加えられている人種・民族マイノリティはアフリカ系だけではない。ドラマには原作には登場しない、アンと同世代の先住民ミクマクの少女カクウェットとその家族が登場する。そして、彼女はアンや同世代のヨーロッパ系住民との交流から彼らが通っている「学校」にあこがれ、自分も「行くことができる」インディアン寄宿学校を知るにいたる。そして、寄宿学校の実態を知らない彼女は、親の反

対にもかかわらず自らの選択で入学し、そこで虐待を受けることになる。

ここでこれらふたつの人種マイノリティ・グループについて、2017年に放送が始まった『アンという名の少女』における新たな情報書き込みが、当時の視聴者に分かりやすい多様性の象徴として利用された背景を考えてみたい。まずアフリカ系住民に関しては2010年代前半に、特にアメリカ合衆国における警官による黒人への差別的取り扱いへの抗議から始まったブラック・ライブズ・マター運動（Black Lives Matter Movement）が記憶に新しい人も多いだろう。この運動の重大な局面であるジョージ・フロイド・プロテスト（George Floyd Protest）が起こったのは、北米地上波におけるドラマの放送終了後間もない2020年春である。

一方カナダの先住民をめぐる状況についても、この時期大きな動きがあった。ここでは、カナダにおける先住民と支配者層のヨーロッパ系住民との和解のプロセスについて詳しいブリティッシュ・コロンビア大学のインディアン寄宿学校の歴史と対話センター（Indian Residential School History and Dialogue Centre）のウェブサイトを参考に、近年の先住民をめぐる状況の変化の要点をまとめる。まず、2008年に特に先住民からの虐待の申し立てが多かった寄宿学校という負の遺産について、当時の首相スティーブン・ハーパー（Stephen Harper）が公式謝罪する。これは1991年の先住民に係る王立委員会（Royal Commission on Aboriginal People）創設に始まる先住民社会に残された長年の白人支配によるコミュニティへの傷跡の調査、ならびに両者の和解への取り組みの一里塚として重要であろう。その後、2015年にはこの問題を含む先住民に対する数百年間の「虐待とネグレクトの歴史」を明らかにした、真実と和解委員会（Truth and Reconciliation Committee）の最終報告書が完成する。日本ではNHKの存在に近く、カナダ的価値観の拡大に寄与してきたCBCが関与した『アンという名の少女』の制作発表（2016年８月）は、時系列上では、この最終報告に続く形になる。

カナダ先住民に関しては、日本には通常あまり情報が入ってこない。しかしながら、2021年にカトリック、プロテスタント双方のキリスト教の教会が運営に大きな影響力を持っていたインディアン寄宿学校跡から、相次いで大量の子どもの遺体が発見された事件に関しては別であった。特に2022年夏、カナダ訪問中のローマ教皇フランシスコが、カナダ・アルバータ州でこの先住民児童虐待事件ならびに、先住民抑圧にキリスト教徒が関与したことに対して公式に謝罪したおりには（2022年７月25日）、日本のメディアでも大々的に報じられていたことが記憶に新しい。『アンという

名の少女』は、日本の地上波では少し遅れて2020年から2022年にかけてNHKによって放映された。特に先住民キャラクターが主として登場する第３シーズンは、2021年11月より翌年３月まで放映されていた。したがって、このドラマが視聴者に提供した、カナダのインディアン寄宿学校に関する知識が、日本のメディアの動きにも影響を与えた可能性は否定できない。

ここまでに、『アンという名の少女』には『赤毛のアン』には登場しない人種・民族マイノリティが、ウォーリー＝ベケットの「カナダの過去と現在の多様性を反映する」というねらいを実現すべく、書き込まれていることはお分かりいただけたと思う。確かに、『赤毛のアン』にも若干のマイノリティは描かれている。ただ、前述の通りドラマでは重要な役割を与えられているジェリーは、『赤毛のアン』では単に「フランス系」（原典では“French”。翻訳者のなかにはドラマの字幕制作者も含めて「フランス人」と訳している人もいるが、この語に関しては「フランス系」ないしは「フランス語系」とする方がカナダの社会的コンテキスト上適切）と説明されており、ケベック人とは文化的に異なるフランス系民族グループ、アカディア人としてのジェリーのアイデンティティが明確化されていない。ジェリーに加えて、『赤毛のアン』第27章で登場する、ドイツから来たユダヤ人行商人も移民ではある。この章では行商人から買った毛染めでアンの髪が緑に染まったり、マリラが彼をイタリア人だと決めつけたことから、アンと言い争いになったりするなど、印象的なエピソードが多いので、記憶されている方も多いだろう。ただ、これら英語系以外のマイノリティ登場人物は、いずれもヨーロッパ系、端的に言えば白人にとどまっている。したがって、アフリカ系と先住民の書き加えは、実に大きな改変である[2)]。

２．性的マイノリティの加筆

『アンという名の少女』で新たに「多様性」を実現するために、書き加えられているのは、ここまでにみた人種・民族的マイノリティのみではない。カナダの多様性の一翼をなす性的マイノリティも同作品では書き加えられているのだ。虎岩朋加と池田しのぶが、2022年の日本カナダ文学会における研究発表で指摘する通り、2010年代半ば以降性的マイノリティのメディアにおける主流化は日本でも進行しているから、この点についてはそれほど意外に感じない人もいるであろう。『アンという名の少女』においては、性的マイノリティを原作との関連性を断ち切ることなく包摂するた

めに、ギルバートの他にも既存のキャラクターの設定が大きく書き換えられている。

例えば、アンが嫌っていた小学校の教員フィリップスとシャーロットタウンに住むダイアナの大叔母、ジョゼフィーン・バリーの人となりは、その目的を達成するために大きく変化している。彼らは性的マイノリティとして書き換えられているのだ。フィリップスは『赤毛のアン』同様に、ドラマの中でも年長の女子生徒プリシーと恋愛関係にある。『アンという名の少女』では、それはフィリップスの同性愛的傾向を隠ぺいするための行為であることが示唆されるのだ。この時、理不尽な暴力の矛先としてフィリップス自身の同性愛的傾向を前景化して見せるのが、前述のセバスチャンやカクウェット同様に、まったく新しく書き加えられたキャラクターである性的マイノリティのクラスメイト、コール・マッケンジーである。コールはやがてアヴォンリーという閉鎖的かつ保守的なコミュニティを捨て、州都シャーロットタウンにおいてジョゼフィーンの加護をうけて生活するようになる。ジョゼフィーンは『赤毛のアン』で、田舎育ちのダイアナとアンをシャーロットタウンに招待したり、シリーズ３作目『アンの愛情』（*Anne of the Island,* 1915）の第18章では、経済的には豊かとはいえない大学生となったアンに財産を残したりと、若者たちにサポートを惜しまない、裕福な「独身貴族」として描かれている。ただ、モンゴメリはジョゼフィーンが、アンという因習破壊的な孤児を支援する理由は描かれていない。

そこで、ウォーリー＝ベケットは、『アンという名の少女』において、『赤毛のアン』のジョゼフィーンにあらかじめ与えられた若者を応援する独身女性という設定に、彼女がガートルードという自身のボストン婚女性パートナーを悼むレズビアンであったとする背景を書き加えて、2010年代後半以降の北米を生きる視聴者をひきつけようとするのだ。このようなキャラクター設定の加筆が、『アンという名の少女』では、ジョゼフィーンにとっては可愛がっていた甥の子であるダイアナの親友であるアンばかりか、アヴォンリー出身という以外には自分には特に縁がないコールを、村に居場所のないアーティスティックな性的マイノリティであるという理由で、自らのコミュニティに受け入れるというナラティブを可能にするのだ。

こうした性的マイノリティに関するナラティブの加筆が第２シーズンでなされた背景には、カナダにおいてその制作時期に前後して躍進した、セクシュアル・マイノリティの人権保護の進展が影響していると考えられる。詳しくは、ドミニク・クレマン（Dominique Clément）の『カナダ人

権史』（*Human Rights in Canada*, 2016）を参照いただきたいが、カナダは2005年に同性婚を合法化することに成功した。その後もセクシャル・マイノリティの権利は拡大をつづけ、2017年には法律によって性的指向や性同一性による差別が禁止され、パスポートの性別欄に、男性でも女性でもない「X」と書き込むことが可能になった。さらに、2017年11月28日には首相ジャスティン・トルドー（Justin Trudeau）によって、「我々」――ここではカナダ政府だろうか？――の「過去の行い」（“the things we have done”）について、LGBTQ2コミュニティに対する公的謝罪がなされた。1967年から法案が議論され、1969年５月に議会を通過した刑法改正法により同性愛の非犯罪化が成し遂げられたのは、彼の父ピエール・トルドー（Pierre Trudeau）の首相在任中であったことも、ここに記されるべきであろう。実際の謝罪文はジャスティン・トルドーの公式ウェブサイトに掲載されているので、参照されたい。『アンという名の少女』の第１シーズンは、2016年夏に制作発表がなされ、カナダでは2017年春には地上波放映を終えた。ただ、特にセクシャル・マイノリティへの言及が多くなる第２シーズンについては、2017年夏に制作発表がなされ、2018年秋に放映されたことを考えると、こうした背景がウォーリー＝ベケットおよび制作チームの「多様性」の構築のありかたに影響を与えたことが考えられる。

本章でここまで見てきた通り、『アンという名の少女』は、『赤毛のアン』における既存のキャラクターの肉付けを変えながら、新規のキャラクターを物語に組み込むことに成功している。ただ、ここにもう一つの問題意識が沸き上がる。この作品は21世紀「現在」のカナダ、特にトロントやバンクーバーといった大都市圏にみられる人種・民族、セクシュアリティの多様性に忠実に作り替えられている。ただ、それは『赤毛のアン』の設定である19世紀後半のカナダ、特にプリンスエドワード島を含む沿海諸州の史実に忠実な物語づくりなのだろうか。次章ではこの点について考えてみたい。

Ⅲ　『赤毛のアン』と『アンという名の少女』のコンテントの違い：ドラマは歴史に忠実になのか

さて、前章冒頭で筆者は、総合統括プロデューサー陣の中でも、代表クリエイターでスクリプト担当のウォーリー＝ベケットと、代表的な総合統括プロデューサーであるド・パンシエのドラマの政策方針をめぐる発言が必ずしも完全に一致していないことを示唆した。前章ではスクリプトを監

修したであろうウォーリー＝ベケットの意図がいかに『アンという名の少女』の物語づくりの中で実現されているのかを検証したが、本章ではド・パンシエの意図がドラマでどのような形で昇華されているのかを検討したい。

前掲の2019年11月のエイハーンによる『CBCニュース』（ウェブ版）の記事によれば、ド・パンシエは同年２月に『アンという名の少女』における「古典の改造」――本人は“reinventing a classic novel”という言葉を使っているが――について、「今日の視聴者に関係があるようにするのでなければ意味がない」と言い切っている。この点については多様性の繁栄を目指すウォーリー＝ベケットと大きな見解の違いはない。ところが2017年３月のナイジェル・ハント（Nigel Hunt）による記事を読むと、この聴衆との関連性を作り上げるにあたり、ド・パンシエは、単に現代の視聴者の関心をつかむことのできる程度の現実味のある作品をつくるのではなく、それが「いつぞの時代劇のようにならないようにドキュメンタリ・レベルのリアリズム」を作り出すことに努め、聴衆が「1890年代のプリンスエドワード島」を直に感じることができることを目指しているというのだ。つまり、彼女の目標はウォーリー＝ベケットのそれとは少し異なる感がある。

ここで筆者が注目したいのは「ドキュメンタリ・レベルのリアリズム」と「1890年代のプリンスエドワード島」というキーワードである。というのは、筆者はこの作品のリアリズムがドキュメンタリ・レベルであるとは考えないからである。では、『アンという名の少女』では、何を根拠にして、どのくらいのレベルで、どの時代がどの程度再構築されているのであろうか。オリジナルの『赤毛のアン』は1870年半ばから80年代初頭のプリンスエドワード島を舞台にしているのだが、ここでは、前章で取り上げた人種・民族的多様性を表象するうえで、ドラマの制作者が物語のはじまりを1896年に移動することで、どのような効果をつくりだされるのかを検証したい。

１．史料で見るプリンスエドワード島の人種・民族的多様性

まずは人種的・民族的多様性について考えてみたい。ここで筆者は訪問者以外のアフリカ系および先住民が、1890年代半ばから後半にかけてのプリンスエドワード島の北岸、キャベンディッシュ付近に定住しているという『アンという名の少女』の設定が史実に照らして可能だったのかを、非常に大雑把ではあるが、1871年からつづく『カナダ国勢調査』（*Census*

of Canada）を参考に検証したい。当初10年に一度の実施だった国勢調査は、1971年からは５年に一度の実施となった。紙媒体も存在するが、カナダ国立図書館・文書館（Library and Archives Canada）のウェブサイトからも、1825年から1926年の間に国内で行われた各種人口動態調査のデータベースを使用することもできる。

確かにカナダ人口統計局（Statistics Canada）による2016年の国勢調査によれば、カナダは国家単位では実のところ人口の２割以上が可視的マイノリティとなっている。このような状況の中であれば、ウォーリー＝ベケットの考えるところの「現在のカナダの多様性」を『アンという名の少女』をもって表現することは現実的であるし、その意義も伝わりやすい。しかしながら、プリンスエドワード島は2016年現在でもヨーロッパ系住民が９割以上を占め、特にケルト系（ウェールズ、アイルランド系を含む）の血をひく住民率が８割をこえている。一方、それ以外の可視的マイノリティは５％にも満たない。先住民に関しては人口の２％程度である。また統計では“Black”と表記されるアフリカ系はわずか0.6%である。

若干話が逸れるが、この統計で「アフリカ系」ではなく「ブラック」という表記が用いられることは、カナダの沿海諸州の歴史的文脈には適切と言えよう。それは彼らの中にはアメリカ独立戦争に前後してイギリスに忠誠を誓い、現在のアメリカ合衆国側からカナダにやってきたブラック・ロイヤリストの子孫たちや、この時期に入植したイギリス系住民とともに島に来た使用人（奴隷）の子孫も少なくないからである。そして彼らの中にはアフリカのルーツを主張するより、白人ロイヤリスト同等に、自らがカナダという土地に根差している「土着の黒人」（“Indigenous Black”）であると考え、それ相当の権利が与えられることを求めている人も少なくない。したがって、このタームの使用は些細であるが重要である。

このように、ウォーリー＝ベケットやド・パンシエの発言は、現在でも文化的状況の大きく異なるプリンスエドワード島を舞台とする物語を、カナダの住民が集中する他地域、特にバンクーバー、トロント、モントリオールといった大都市圏の現実に合わせて改変し、それをあたかも現実のように伝えている。これは現在のプリンスエドワード島が、カナダの他地域と同様に「多様」な社会であると、カナダおよび世界の視聴者に思わせることで、中央カナダ（オタワ）や大都市主導のリベラルでマルチカルチュラルなカナダのイメージを拡大させていく戦略なのかもしれない。ただ、プリンスエドワード島の現実を知るものにとっては、現実離れの感はぬぐい切れない。

とはいえ、古い時代の国勢調査（1881）、並びにプリンスエドワード島連邦加入以前に行われた、州による人口動態調査（1871）を検証すると、物語の設定を20年程度先にずらすことで、物語の設定である島北岸のキャベンディッシュ周辺では、少なくともアフリカ系住民であるセバスチャンや、先住民のカクウェットの存在は不可能ではなくなる。『カナダ国勢調査』を1901年まで下っていくと、キャベンディッシュ付近にもアフリカ系住民が３名現れる。これはセバスチャンとかつてシャーロットタウンに存在したスラム街「ザ・ボグ」（The Bog、現在のビクトリア公園付近）から、結婚してキャベンディッシュに移住する妻のメアリ（娘を出産後、程なくして死亡）と夫妻の娘、そして後に家族に加わるメアリの連れ子のイライジャなどの存在とも大きく齟齬がない。プリンスエドワード島にかつて存在したアフリカ系コミュニティについては、法律家であると同時に郷土史家でもあるジム・ホーンビー（Jim Hornby）による『ブラック・アイランダーズ』（*Black Islanders*, 1991）に詳しい。

また、『アンという名の少女』では、アンやマシューは馬に乗ってカクウェットやその家族のキャンプに行くシーンが出てくるが、キャベンディッシュの南隣の地域には当時６人の先住民がいたとの記録がある。おそらくド・パンシエの「ドキュメンタリ・レベル」という発言は大げさで、ここに描かれる人種的多様性は、1901年の『カナダ国勢調査』の結果とは大きくそぐわないという程度であろう。ただ、『赤毛のアン』のように、1901年の国勢調査に反映されないそれ以前の設定にしてしまうと、アフリカ系と先住民がキャベンディッシュに同時期に存在していたという根拠がなくなる。従って、『アンという名の少女』の設定は、やはり、嘘にならない程度に、若干存在した人種・民族マイノリティを反映するためにも、歴史上20年ほど後に下る必要がある。

ただ、カクウェットが送り込まれるインディアン寄宿学校の設定が非現実的な点は指摘されるべきであろう。沿海諸州にはカナダの他地域に比べ、寄宿学校が少なかった。特に、プリンスエドワード島州とニューブランズウィック州には寄宿学校は存在せず、ノヴァスコシアに１校存在したのみである。ドラマの第３シーズンで、カクウェットは学校から船に乗って逃げ帰ろうとする。またプリンスエドワード島の先住民の実体験を伝えるナンシー・ラッセル（Nancy Russell）の記事からも、ここで描かれる寄宿学校はノヴァスコシア州にあったシュベナカディ・インディアン寄宿学校（1930－67）をモデルにしていると思われる。ただ、この学校はドラマの設定とされる世紀転換期にはまだ存在しない。船で往来することを考える

と、セントローレンス湾でつながるケベック州の可能性もゼロではないが、やはり、この時代はケベックにも寄宿学校は存在しない。従って、このくだりは完全なフィクションであると思われる。ただ、大陸横断鉄道はすでに開通していたので、本土で船に乗り換え、インディアン寄宿学校が多く存在した、オンタリオ以東に連れていかれた可能性はゼロではない。

2．史料に残せなかったプリンスエドワード島の性的多様性

ここまでは、統計等で比較的容易に裏付けを取ることができる世紀転換期の人種・民族的マイノリティの在り方についてみてきた。一方で『アンという名の少女』が注目するもう一つのマイノリティである性的マイノリティについては、筆者は19－20世紀転換期のプリンスエドワード島の状況が分かる資料／史料にまだ出会えていない。無論、時代に関わらずヒトの一定数は異性愛者、シス・ジェンダーではないというから、彼らがそこにいたこと自体は確かであろうが。したがって、ここでは、ジョゼフィーンが催したクイア・パーティの現実性を含む『アンという名の少女』に描かれるプリンスエドワード島の性的マイノリティの状況の信ぴょう性については学術的な見解を示すことができない。もしこれを読まれた方で、ご存知の方がおられたら、是非ご教示いただきたい。苦肉の策として、ここでは比較的記録が残されており、鉄道でプリンスエドワード島とつながっていた東部の大都市モントリオールを中心に、カナダ沿海諸州との文化つながりが強い北米東部の事例から推測するにとどめたい。

例えば、詳しくは歴史家のリリアン・フェダーマン（Lillian Faderman）の著作を参考にしていただきたいが、ドラマに登場するジョゼフィーンとガートルードのように、経済的に自立した女性が二人で住むボストン婚は北米東部ではこの時期にはしばしば見られた形であったから、シャーロットタウンでそれがあったとしてもそれほど違和感がない。また大規模なパーティーを主催できるほどのコミュニティの存在についても、完全に否定はできない。少し時代を下って1918年にはエルザ・ギッドロウ（Elsa Gidlow）とロズウェル・ジョージ・ミルズ（Roswell George Mills）が、プリンスエドワード島から一番近い大都市モントリオールで、恐らく北米初の性的マイノリティ向け雑誌であったであろう『レ・ムシュ・ファンタスティーク』（*Les Mouches Fantastiques*）を出版しているからである（Canadian Centre for Gender and Sexual Diversity）。つづいて、パーカー・シェリー（Parker Sherry）によれば、さらにその10年後には、後にカナダで初めてアフリカ系オーナーが始めたナイトクラブと

しても重要なロックヘッズ・パラダイス（Rockhead's Paradise）をひらくことになるルーファス・ロックヘッド（Rufus Rockhead）が、今でいうゲイバーやドラァグ・パーティーのルーツとなる「女装した男性」（女性の物まねを意味する“female impersonator”と表現）を起用したショウを行っていたことがわかる。このような状況から、物語の設定である世紀転換期には、モントリオールでは少しずつ性的マイノリティのコミュニティが成熟しつつあったと言えよう。シャーロットタウンではまだその動きが黎明期にあったとしても、各地を旅する経済力を持つジョゼフィーンのような人物が、世界およびカナダ各地からアーティスティックな性的マイノリティを集めて仮装パーティーを個人宅で開催していた可能性は、全くないとは言えない。

プリンスエドワード島の性的マイノリティの歴史の一端は、2020年のサラ・フレイジャー（Sara Fraser）によるデイヴィッド・スチュワート（David Stewart）の発言に言及する記事からうかがい知ることができる。ただプライドPEIのディレクターであり多才なクリエイターでもあるスチュワートは次の点を指摘している。第一に1968年まで同性愛行為が犯罪であったカナダにおいて、こと同性婚合法化に関してもカナダ国内で一番遅かったことで知られる保守的なプリンスエドワード島の性的マイノリティたちは、彼らの行動の記録を残すことを意図的に避けてきたというのである。そのため同島の性的マイノリティの歴史は、近年当事者を中心に調査が始まったばかりであり、1970年代半ば以前の事項に関してはほとんど記録がないのだという。ケイトリン・ダウニー（Caitlin Downie）によれば、シャーロットタウンでは2013年からはShOUT!と名付けられたジェンダー・セクシュアリティ・アウェアネス会議が開催されており、少なくても2018年までに５回開催されている。プリンス・エドワード・アイランド大学を母体とし、性的マイノリティに安全な場所を提供し、性的マイノリティとそうではないものの友好的な連携を目指すGSA（Gay-Straight Alliance）団体や、同大学の多様性・社会的正義プログラムがその開催に関与していることから、今後研究の発展が期待できるであろう。

結局のところ、これまでに私が見つけることのできた資料は、前掲のスチュワートが、自らが属するプリンスエドワード島の性的マイノリティ・コミュニティのメンバーをインタビューすることで、その歴史を1970年代半ばまでたどる、全６回のウェブ・ドキュメンタリー作品『Grindr前史――プリンスエドワード島のゲイ、レズビアンの秘められた社会史』（*Before Grindr: The Secret History of Gay & Lesbian P.E.I.*, 2020）のみである。この

作品はプライドPEIとPEERS同盟（PEERS Alliance, 旧AIDS PEI）という当事者主導の団体の支援を受けて、スチュワートとローラ・ショパン（Laura Chopin）との共同プロデュースで制作されたものである。同作品の第２エピソードでは、ドラァグ・クイーンのアンバー・フレイムス（Amber Frames）が、まだカミングアウトすることが一般的ではなかった時代――インタビューを受けた当事者は52歳から72歳であるから、それほど昔ではない――には、自らの居宅を含めて、プリンスエドワード島各地の個人宅で数百人の性的マイノリティが集まるパーティーが行われていたことを語っている。こうしたコメントもまた、ジョゼフィーンが『アンという名の少女』で行ったようなパーティーが存在し得た可能性を示す。

むすびにかえて

『アンという名の少女』にみられる時代設定を世紀転換期のプリンスエドワード島に移動するという操作は、ウォーリー＝ベケットの現在と過去のカナダの多様性を反映するという目標を、ドラマの中で実現することを可能にすると同時に、ド・パンシエの目指した「ドキュメンタリ・レベル」のリアリズムは達成できていないものの、おおむね全くあり得ない話ではないというレベルのリアリズムを達成することを可能にした。第Ⅲ章でまとめた通り、人種・民族的多様性については、1901年の『カナダ国勢調査』を根拠としている感があり、「ドキュメンタリ・レベル」の時代再現はかなわないものの、新たに作られた物語の時代考証はそれなりにされていることがわかった。ただ、当時プリンスエドワード島の性的マイノリティが置かれていた状況に関しては、時代考証のための史料自体が残されていないので、筆者同様に他州の状況をもとに想像／創造したところが多いのではないかと思う。

本稿では人種・民族的マイノリティと性的マイノリティの包摂にのみ焦点をあてたが、実のところ『アンという名の少女』が表現しようとした『赤毛のアン』に描かれていないカナダの多様性は他にも多数あり、製作者側の包摂性への強いこだわりを感じざるを得ない。例えば、『アンという名の少女』が踏み込んで描いている、女性一般に加え、男女を問わず独身者やこどもたちのステレオタイプを超えた多様な表象については、さらに踏み込んだ研究が必要な興味深いナラティブづくりが見られる。プリンスエドワード島の性的マイノリティの歴史についても、本当に史料がないのか時間をかけた検証を行う必要があることが明らかにされた。また、今後シリーズが再開されることがあれば、多様性の一翼としてここには正面

から描かれていない高齢者や障害を持つ人々を包摂してゆくことも可能であろう。このように今後の研究や物語展開の可能性を示して、本稿を終えたい。本稿が少しでも目が不自由な人々の授業理解の助けとなることを期待する。

本稿の研究は敬和学園大学人文社会科学研究所の助成（「カナダ映画の敬和学園大学における人権教育への応用」）により可能となった。また、本稿は2022年１月11日に行われた中京大学英文学会秋期研究大会（オンライン開催）における筆者の講演「文化表象を多様化する：よりインクルーシブなコミュニティの形成を目指して」の一部に加筆修正を加えたものでもある。関係各所にお礼を申しあげたい。

註

1) 授業に先立って2022年10月３日に簡易な立体地図を使って、アメリカ州の国々、特に北米の国々の位置関係、さらにはプリンスエドワード島とカナダ本土の位置関係を確認した。立体地図は国ごとのパーツからなるものであったため、国の大きさを手で触れて確認したうえで、立体地図でも立体的に表現されていない、ちいさなプリンスエドワード島を粘土で再現して、その小ささを確認した。10月５日、10月19日の２回の授業では「見える学生」がスライドや紙の地図を使うのと同様に、アシスタントと一緒に立体地図を触ってもらった。

2) 当日の授業は避難訓練と重なり実質60分となったため、このあたりで終了となった。Ａ４、５枚程度である。スライドや原稿等は水曜の授業に合わせて、直前の土日に当人並びに支援グループに予習用に送付したが、当日も投影されているスライドをアシスタントの学生と確認する時間等が必要になるため、授業は時間的に余裕をもって計画しなければならないことが分かった。

3) 日本語字幕中では字数を減らすためか、村岡花子訳へのオマージュか、それとも訳者の配慮不足か、フランス人と記載されている所もみられた。

参考・引用文献

Ahearn, Victoria. “*Anne with an E* Cancelled after Three Seasons.” *CBC News*, 25 Nov, 2019, www.cbc.ca/news/entertainment/ann-e-cancelled-tv-canada-1.5372527. Accessed 29 Sept 2022.

Clément, Dominique. *Human Rights in Canada.* Wilfrid Laurier UP, 2016.（ドミニク・クレマン著『カナダ人権史――多文化共生社会はこうして築かれた』細川道久訳、明石書店、2018。）

Downie, Caitlin. *LGBTQ+ Inclusiveness: Tool Kit for Inclusive Municipalities in Canada and Beyond*. Canadian Commission for UNESCO, 2019.

Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love Between Women from the Renaissance to the Present*. William Morrow & Company, 1981.

Fraser, Sara. “History of Queer Islanders Subject of New Web Series.” *CBC News*, 29 Nov 2020, www.cbc.ca/news/canada/prince-edward-island/pei-queer-islanders-podcast-dave-stewart-1.5819736. Accessed 29 Sept 2022.

Hornby, Jim. *Black Islanders: Prince Edward Island's Historical Black Community*. U of Prince Edward Island, 1991.

Hunt, Nigel. "'Ain't your grandmother's Anne': New Series Gives Gritty Green Gables amid Glut of Anne Adaptations." *CBC News*, 17 March 2017, www.cbc.ca/news/entertainment/anne-green-gables-1.4028193. Accessed 29 Sept 2022.

Indian Residential School History and Dialogue Centre. "The Indian Residential School Settlement Agreement." U of British Columbia, irshdc.ubc.ca/learn/the-indian-residential-school-settlement-agreement/. Accessed 29 Sept 2022.

Library and Archives Canada. *Censuses*, 2021, www.bac-lac.gc.ca/eng/census/Pages/census.aspx. Accessed 29 Sept 2022.

Montgomery, Lucy Maud. *Anne of Green Gables*. L.C. Page, 1908.（L.M. モンゴメリ著『赤毛のアン』松本侑子訳、文春文庫、2019。）

---. *Anne of the Island*. L.C. Page. 1915.（L.M. モンゴメリ著『アンの愛情』松本侑子訳、文春文庫、2019。）

Nguyen, Hanh. "'Anne With an E' Boss Answers Burning Questions About the Queer Soirée, Season 3, and More." *IndieWire*, www.indiewire.com/2018/07/anne-with-an-e-season-3-queer-soiree-bash-moira-walley-beckett-1201984101/2/#!. Accessed 29 Sept 2022.

"Queer Canadian History Timeline." *Canadian Centre for Gender and Sexual Diversity*, July 2018, ccgsd-ccdgs.org/. Accessed 29 Sept, 2022.

Russell, Nancy. "P.E.I. Residential School Survivor Says Historic Recognition Is Part of Healing." *CBC News*, 1 Sept 2020, www.cbc.ca/news/canada/prince-edward-island/pei-residential-schools-historic-site-shubenacadie-1.5708251. Accessed 29 Sept 2022.

Sherry, Parker. "A City Untucked: Drag History in Montreal: How the Montreal Drag Scene Was Formed." *The Link*, 26 Oct 2020, thelinknewspaper.ca/article/a-city-untucked-drag-history-in-montreal. Accessed 29 Sept 2022.

Statistics Canada. *Data Products*, *2016 Census*, 2021, www12. statcan.gc.ca/census-recensement/2016/dp-pd/index-eng.cfm. Accessed 29 Sept 2022.

Stewart, D.A. and Laura Chopin. *Before Grindr: The Secret Social History of Gay & Lesbian P.E.I.,* 2020, www.rainbowhub.ca/before-grindr/. Accessed 29 Sept 2022.

杉藤貴浩「『悪行、許しを請う』ローマ教皇がカナダで先住民に謝罪『寄宿学校』舞台に同化政策と虐待の歴史」『東京新聞』ウェブ版、2022年７月26日、www.tokyo-np.co.jp/article/191979. アクセス日2022年９月29日。

Sullivan, Kevin, dir. *Anne of Green Gables*. Sullivan Entertainment. 2010. DVD.（ケヴィン・サリヴァン監督、『赤毛のアン』、松竹ホームビデオ、2002。DVD。）

虎岩朋加、池田しのぶ「メディアのLGBT主流化に見られる女性たちの位置付け―ドランの映画『わたしはロランス』を手がかりに」日本カナダ文学会第40回年次研究大会、2022年６月18日、於・学習院女子大学、口頭発表。

Trudeau, Justin. "Prime Minister Delivers Apology to LGBTQ2 Canadians." *Prime Minister of Canada Justin Trudeau,* 28 Nov 2017, pm.gc.ca/en/news/news-releases/2017/11/28/prime-minister-delivers-apology-lgbtq2-canadians. Accessed 29 Sept 2022.

Walley-Beckett, Moira, et al., creators. *Anne with an E*. 3 Vols. Pelican Ballet, Northwood Entertainment, and CBC. Entertainment One. 2017, 2018, 2020. DVD.（モイラ・ウォーリー・ベケット他、『アンという名の少女』DVDボックス全３巻、ペリカン・バレー、ノースウッド・エンターテインメント、CBC制作、NHKエンタープライズ、2021。）

Zillman, Claire. "'I Am Sorry. We Are Sorry.' Read Justin Trudeau's Formal Apology to Canada's LGBTQ Community." *Fortune*, 29 Nov 2017, fortune.com/2017/11/29/justin-trudeau-lgbt-apology-full-transcript/. Accessed 29 Sept 2022.